大声で笑ったトムたち

あの「バカ騒ぎ事件」があってから、ネロとサラは3人で集まることに引け目を感じてました。本当は休み時間や放課後、2人のところへ行きたいのですが、どちらへも行けなかったのです。時間が経てば経つほど、どんどん2人のところへ行きづらくなっていきました。そして雨が多い季節になる頃には、心のどこかで2人のことを想いながらも、以前と同じ生活に戻っていきました。

トムは1人でいた時も3人でいた時もいつもぼんやりしていたので、どっちみち変わりませんでした。ただ放課後の帰り道、歩くはやさがほんの少し、本当にほんの少しはやくなっていることには誰も気が付きませんでした。

毎日とは、一日として同じ日はないはずです。なのに、まるで全く同じことをくり返しをしているのではないかと、さっかくしてしまう時があります。ネロとサラは昨日も今日も降り続く雨の中、そんなさっかくにとらわれていました。明日の予報もまた雨です。そんな毎日に二人はうんざりしていました。せっかくなら、3人と一緒にいる日々をくり返しているとさっかくしていたかったのに。

ただ一つ以前とちがうことは、雨の音をよく聞くようになったことです。雨にぬれ、うっすらモヤのかかった町を、ゆっくり見るようになったことです。そして、何日も雨が降り続いたある夜のことです。家の窓のから、ふり続く雨の音を聞いていた時、街灯にてらされた雨の影を見ていた時、ふと雨の様子が変わった気がしました。闇夜から降り注ぐ雨に、何かさっきまでなかったふわっとしたものが混じったような、夢の中で、もしかしたらこれは夢の中なのかと気づいた瞬間のような、そんな感覚でした。ぐうぜんにも、ネロとサラはそれぞれの家の窓辺でそのことに気がつきました。二人は気のせいだろうと思いながらも、遠くの空が少し明るくなってきたような、そんな気分がしました。ただ何が変わったわけでもなく、がっかりするのはいやだったので、気のせいだと自分に言い聞かせて、二人は深く布団をかぶりました。

次の日の朝、ネロは起きるなりすぐにカーテンを開けました。雨はまだシトシト降っていて少しがっかりです。サラは起きてすぐにカーテンは開けず、電気を付けました。何かを期待していたからです。そして外を見ないように朝ごはんを食べ、支度をしてドアを開けました。雨はまだシトシト降っています。サラもがっかりしましたが、やはり何かがちがう気もしました。ですが、これ以上がっかりはしたくないので、思いちがいだと自分に言い聞かせました。

二人は学校へ行くと、いつものように自分の席に座り、授業のじゅんびをしました。今日も同じ日をくり返しているのかもと言うさっかくにとらわれました。しかし、授業が始まろうとする時、いつもとちがう光景に二人は気づきました。

トムがいないのです。いつもおそく登校するトムですが、学校を休むことはほとんどありません。しかし、この日はギリギリになっても現れないのです。

二人はなんかあったのかと心配になりました。ネロはサラの方を見ました。サラはもうネロの方を見ていました。久しぶりに目が合ったので、お互い少しはずかしい気持ちになりましたが、それどころではありません。ネロはサラのところに行き「トムいないね」と言いました。サラも「風邪とか引いてなければなければいいけど」とトムを心配しました。そして、久しぶりに話せたことがお互いちょっと嬉しく、ちょっとホッとしました。

ただ、事態はそれよりもっと大ごとになっていました。授業のチャイムがなった時、二人はそのことに気がつきました。授業の開始時間をすぎてもチェイニー先生が教室に入って来ないのです。チェイニー先生は、いつも時間きっかりに教室に入ってくるからです。これには、クラス全体がざわつき始めました。

その時です。学校全体にひびきわたらんばかりのどなり声がとどろきました。ネロたちの教室にもうっすら聞こえましたが、サラとネロはこのどなり声には覚えがあり、とてもイヤな気分になりました。そう、アビゲイル校長のどなり声です。トムとチェイニー先生がいない、そしてアビゲイル校長のどなり声。ネロとサラはとても不安になりました。ネロが勇気を出して「サラ、校長室へ行こう」と言いました。サラはどなられたことを思い出し、すごく怖くなりましたが、うんと言って立ち上がりました。

ネロとサラは教室を飛び出しました。やはり校長室へ向かうにつれ、どなり声がどんどん近づいてきます。二人の不安はどんどん大きくなります。そして、ついに不安はかくしんに変わりました。「トムよ、お前がどんなじょうしきはずれなことを言っているのか分かっているのか！」アビゲイルの声がとどろきます。チェイニー先生のあせる声も聞こえます。「トムくん！　校長先生にあやまりなさい！」もう、怖さで二人の足はガクガクふるえています。それでも、勇気をふりしぼって校長室のドアをノックしました。

「すいません！　ネロとサラです」

ネロはそれ以上言葉が出てきません。校長室はしずまりかえり、そしてドアに向かってくる足音が聞こえてきました。二人はもうしんぞうが飛び出しそうです。

ガチャっとドアが開くとチェイニー先生でした。そして、ふくざつな顔をしていましたが「入りなさい」と、二人を校長室の中にまねき入れました。中には、思った通り、アビゲイル校長とトムがいました。二人が入ってきてもトムはサラたちの方を見ません。ネロは「いったい何があったのですか？」と聞きました。アビゲイルが怒りをまき散らすように言います。

「どうもこうもあったもんじゃないよ！　トムはね、話があると言うから聞いてやったら、空き地でうるさくしてもいいことにしてくれと言うんだ。全く、頭がどうかしちまってるよ。呆れ果てて、もうどなる気にもならないよ！」さっきからずっとどなっているけどなあと二人は思いましたが、それどころではありません。それが本当なら、トムが言ったことはそうぞうもしていなかったことでした。空き地でうるさくすることで、こないだ近隣の人にめいわくをかけたのです。人にめいわくをかけてはいけません。なのでネロとサラも、なんでトムがそんなことを言ったのか分かりませんでした。

その時、トムが言いました。

「公園がどんどんなくなっています。誰が公園をなくしたんですか？」

ネロとサラはハッとしました。まだ、トムが言いたいことはほとんど分かりませんでしたが、ほんの少しだけ何か分かった気がしました。実はネロたちの町は公園がどんどんなくなっているのです。理由は公園で子供たちがさわぐと、うるさくて近隣のめいわくになるからです。

アビゲイルはまたどなります。

「まだ、おかしなことを言うのかい！　公園がなんだってんだ。あそこは空き地なんだ。公園じゃない。そこでうるさくしたらお前たちが悪い。めいわくかけたお前たちが悪いんだ。それは当たり前のことだろ？」

二人からはトムの顔が見えません。なので、どんな表情をしているのか、かなしい気持ちになっていないか、サラとネロはそれがとても心配でした。

三十秒くらい経った頃、またトムが言いました。

「大人たちは、子供たちにめいわくをかけてますよ。」

ネロとサラは息が止まりそうでした。校長のどんな怒りが来るか、もうそうぞうも出来なかったのです。親を呼び出されてキツく叱られるか、さいあくの場合、学校を辞めさせられるかもしれない。そんな恐怖が二人を包み、固く目を閉じました。またあのどなり声が来るぞ。

しかし、アビゲイルは何も言いません。なんでだろうと思っても、ネロとサラは目を開けることが出来ません。とても耐えられない程の長いちんもくが続きました。ピンと空気が張りつめた校長室に、耳なりのような無音がキーンとひびきます。サラは心の中で「きっと時間って伸びた

りちぢんだりするものなんだわ。そして、たまに完全に止まってしまうものなんだわ。どうか時間よ、動き出して」と、恐怖から目をそらすように願いました。

ネロはあまりの長いちんもくに、恐る恐る目を開けました。そして、おどろきました。アビゲイル校長の怒りに狂った顔を見ることになるのかと覚悟してましたが、ちがいました。ネロの目にうつったのは、トムの顔をじっと見つめ、ひるんだ顔のアビゲイル校長です。トムが一体どんな顔をしているのか、ネロにはそうぞうも出来ません。ただ、トムもアビゲイル校長を真っ直ぐに見ているように見えました。そして、なんと次に話し始めたのはトムだったのです。ゆっくりと、でもとてもまっすぐにトムは話しました。

「うそをついてまで遊ばせないようにしたのはなんでですか？　先生が僕たちの言葉を信用しなかったのはなんでですか？　学校は、大人たちは、誰の幸せを願っているのですか？」

トムの言葉にサラもあわてて目を開けました。ここでどなられたあの日、なんで悔しかったのか少しだけ分かった気がしました。サラはどこかで、大人たちは自分たちの幸せを願ってくれているものだと信じていました。しかし、それはかんちがいかもしれないと思いました。大人は大人の幸せを、学校は学校の幸せを願っているだけかもしれない。サラはそんな風に思いました。そしてもしそうだとしたら、そのせいで自分たちの自由がうばわれるなら、やれることは二つしかありません。従うか、戦うかです。だからトムは戦ったのです。

チェイニーはもう何も考えられませんでした。呆然とこのなりゆきをながめてました。チェイニーは小さい頃からトラブルをきらっていましたし、ルールをは必ず守っていました。それは一見とても良いことのように思えます。しかし、これはまちがっているなと思うことが起きても、トラブルになるくらいならと自分の意見を変えて合わせてきました。先生の仕事を熱心にするのも、トラブルに巻き込まれたくないからです。そう、チェイニーは「良い子」でした。チェイニーはそんな「良い子」であるはずの自分が、果たして立派な大人になれたのか。本当に先生として「正しい」のか。子供たちが自分みたいな大人になることが良いことなのか。何も出来ないまま、そんなことをぼんやり考えていました。

トムの言葉のあと、また少しのちんもくがありました。その間、アビゲイルは何を考えていたのでしょうか。はげしい怒りでしょうか。全くまちがった考えだと呆れていたのでしょうか。それとも、心のどこかにトムの言葉が届いて、身体中にぐわんぐわんとひびきわたっていたのでしょ

うか。それは、誰にも分かりません。ただ、ものすごい奥の、そのまた奥からしぼり出すような声でアビゲイルは言いました。

「トム、お前は退学だ。もうここにはいられないよ。頭の悪い生徒は、この学校にはいられないんだよ。」

その言葉を聞いて、ネロとサラが叫びました。

「校長先生お願いです！　退学だけは、それだけは許して下さい！」

もうぜったいぜつめいだと思ったその時、もう一人大きな声をあげました。チェイニーです。

「アビゲイル校長！　トムは自分の気持ちを言っただけです。気持ちを伝えることは正しくないことではありません。トムの考えが正しいかどうかはこれからみんなで考えます。ですので、退学だけはどうかお許し下さい。」

チェイニーはもう自分がどこにいるのか分からなく、崖の上から、底の見えない深い闇の中に一歩を踏み出してしまったような、そんな恐怖に包まれました。しかし、このチェイニーの一歩がトムを救うことになったのです。

アビゲイルはその言葉を聞いてすごくおどろきました。いつも反対意見を言わないチェイニーがそんなことを言うとは思わなかったからです。そして自分にどなられて、すっかり怯えていたネロとサラが、勇気を出してまたここに来たことに二人の強い想いを感じました。それは、長年校長をやってきた直感が、このままきょうこうにトムを退学させれば、これまで守ってきた「正しい」ことがゆらぎ、学校全体のほころびにつながるかもしれないと告げていました。

アビゲイルは目を閉じて考え、自分の感情よりもこの学校が「しんがくこう」であり続けることの方が大事だと思いました。

「分かった。退学は取り下げる。だけど、近隣の方にめいわくかけておいて、反省していないことはいただけない。トムを1ヶ月の停学処分にするよ。いいね？」

ネロとサラはそれでも悔しかったですが、退学がなくなっただけ良かったと思いました。チェイニーはもう完全に思考停止しています。トムはいったいアビゲイル校長に対してどんな目をしていたのでしょうか。ネロとサラにはそうぞうも出来ませんでした。少しのちんもくが続いたあと

「分かりました」とトムが言いました。

このことは学校中の大きな話題となりました。あんなにアビゲイル校長のどなり声がひびけば当たり前です。とは言え、先生たちもネロとサラも何が校長室で起きたのか話しませんでした。なのでウワサがウワサを呼んで、トムが物を盗んだとか、トムが校長室であばれたとか、どんど

ん話がしっちゃかめっちゃかな方へ進んで行きました。何より、あの「ぼんやりトム」が事件を起こしたことがみんなをおどろかせたのです。ネロとサラは必死にちがうよと言いましたが、ウワサは止まりませんでした。チェイニーはアビゲイル校長に目を付けられないように、今まで以上に熱心に仕事をしました。なんであんなこと言ってしまったのかと自分で怖くなります。しかし、それでも心のどこかで、あの日の自分を少しだけほこらしくも思っていました。

夏休みももうすぐと言う頃、トムの停学が終わりました。トムは本当にあんな事件があったのか、1ヶ月停学していたのかと思うほど、いつも通り登校してきて、なにごともなかったかのように自分の席でまたぼんやりしていました。しかし、ネロとサラにあいさつをすると、すぐにみんなに囲まれてしまいました。かわるがわるトムにあれはこれはと聞きますが、あまりの返事のおそさにみんなしびれを切らしてあきらめていきます。それを見てネロとサラはなんだかおかしくなりました。

その日の放課後、なんとトムからネロとサラのところにやってきました。珍しいどころか初めてのことです。「ついてきて」と言ってトムはゆっくり歩き出しました。このトムについていく感じ、春にマメナシの木を見に行った時を思い出して、二人はなんだかワクワクしました。ただ、空き地に行ってまた同じことになるのも怖かったのです。

トムは相変わらずのんびりと歩いていきます。ネロはやはりおしゃべりです。サラは柵に飛び乗ったり、くぼみをジャンプして飛び越したりしています。デコボコトリオの復活です。しばらく歩いてトムが空き地に向かっていないことが分かりました。いったいどこへ行くのでしょう。ネロとサラはワクワクが止まりません。

季節は夏です。木々たちは濃い緑色にかがやき、虫たちはそこら中で大合唱です。雲はソフトクリームのようにモコモコして真っ青な空に浮かんでいます。くっきりと照らす太陽の下、全てのものが生きるよろこびにあふれています。

並んでいた家と家の間隔が広がってきた頃、トムが「こっちだよ」と言いました。そこは廃屋でした。草は伸び放題で、玄関だったところにもびっしりと生えています。かつて窓があったであろうところにはもう今は何もなく、外と中のきょうかいせんはありません。

トムはその廃屋のわきを進んで裏へ向かいました。狭いへいと家のカベの間をすり抜けると、視界が一気に開けました。そこには小川が流れ、花が咲き、虫たちはいっそう大きく鳴いています。夢に見たようなその美しい光景に、ネロとサラはかんせいをあげました。トムはゆっくりと二人を見てから、ニッコリと笑いました。そして指をさしました。

その先には一本の大きな木があって、そこには、なわでできた階段がぶら下がっているのです。二人はわーっとその木にかけよりました。下から見上げると、階段のその先には、木の床が取り付けられてます。もう二人はだいこうふんです。「トム！　ここは僕たちの秘密基地なんだね。そうだろ？」

トムがゆっくりうなずくと、サラとネロは抱き合ってハイタッチしました。３人は木の上にあがりました。そこからの景色は夏を全て見わたせるような、そこに夏の全てが詰まっているような、そんな素晴らしい景色でした。木の上には床しかありません。トムが言いました。

「３人でこの秘密基地を完成させよう」

ネロとサラがトムに抱きついて、それから３人は大きな声で笑いました。それはそれは本当に、大きな声で笑いました。